

ルースソックス、茶髪、ポケベル：流行現象の社会 心理学的研究 - 採用者の性格、選好、情報収集、 社会的認知 -

著者	三宅 邦建
雑誌名	比較文化
号	3
ページ	115-128
発行年	1997
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000649/

ルースソックス、茶髪、ポケベル： 流行現象の社会心理学的研究 - 採用者の性格、選好、情報収集、社会的認知 -

三宅邦建*

本研究において若者の流行現象（ルースソックス、茶髪、ポケベル）をロジャーズ（1996）の流行採用者カテゴリーの概念にそって研究した。また流行採用と流行情報収集との関係（雑誌購読、社会的比較傾向）、流行の服装への態度をも測定した。ルースソックスの着用は独自性、規則への反発的態度、おしゃれ志向、雑誌購読などと正の相関関係があった。しかし、これらの相関関係は高校時代の規則の強弱と密接な関係があった。大学になってからの着用は同調性と正の相関関係を示した。ロジャーズの理論は支持されたと考えられる。また、流行現象についても過大視バイアスが起り、採用頻度、情報収集、選好度や社会的比較が過大視バイアスを媒介することも見い出された。

In the present study, young people's fashion (baggy socks, dyeing hair, and a personal pager communication) was studied following Rogers' (1996) conceptions of diffusion of innovation. The results indicated that the frequency of wearing baggy socks was positively correlated to scores on uniqueness, rebellious attitudes toward regulations, magazine reading. However, these correlations were moderated by the strength of the dress code at high school. It was also found that scores on conformity were positively related to the frequency of wearing baggy socks. These results confirmed Rogers' theory of diffusion of innovation. In addition, false consensus effects (over-estimation of the frequency of events) were found. Involvement (frequency), information search, attitudes, and social comparison were found to moderate the false consensus effects.

流行と若者は切っても切れない関係にあるようだ。若者は流行事象にめざとく、流行はその新奇さゆえに既成の価値観との摩擦が生ずることもある。本研究においてはルースソックスを中心に茶髪、ポケベルという若者の流行を取り上げた。本研究の出発点はこれらの流行現象がどの程度若者の間に蔓延しているか、採用者と非採用者との間には性格や流行情報の認知に相違があるのだろうかという素朴な疑問であった。

独自性欲求、同調性欲求

さまざまな流行現象が話題になる。「流行」と聞くと多くの人は服装のファッションを思い浮かべるが、人はなぜ着飾るのであろうか。被服は単に外気から身を守るだけの役割りを果たすにとどまらず、人は服装の選択を通して自己表現をする。服装は自我を形成する物質的自我の現われであり（James, 1891）、服装の好みと理想的自我像との関係も報告されている（中川・伊藤、1995）。

流行の服装の採用には個人差がある。社会学・社会心理学の研究は流行の採用には独自性と同調性という二つの欲求が係わっていることを示唆している（鈴木、1997）。他人と分け隔たれた服装などをして個性を主張したいというのが独自性欲求の現われであり、他人と同じ様な服装をしたいというの

が同調性欲求である。この一見相反する二つの欲求は、流行の採用者カテゴリー（Rogers, 1996）概念によって説明が可能である。川本（1981）はある特定の流行をかなり初期段階で採用する者は「個性化」や「差別化」の欲求が後期採用者より強く、反対に後期採用者は前期採用者より「同調性」の欲求が強いことを報告している。同調性の高い者程中期流行段階やそれ以降で流行を採用する傾向にあるというのは他人の行動が社会規範として働き（井上, 1985）、同調者は安全な時期になって初めて流行を採用するためであろう。同調性の高い者にあっては、行動に規制がない状態で他者の行動を採用しやすいといえる。また流行が最盛期を迎えた時に流行を採用している周りの人達が同調への圧力となるとも考えられる。例えば、流行のルースソックスを履くことは集団成員として同調行動的な意味をもつであろう。

しかし欲求の充足にはさまざまな規制がはたらく。ルースソックスに関して言えば、学校の規則が行動の自由をある程度規制していると考えられる。行動の自由が保証されている状態においては、独自性欲求が新奇行動を予測でき、また厳しい規制状態の下では行動を予測できないであろう。行動の自由がある程度規制されている場合には独自性欲求がより一層個人を希望通りの行動に駆り立てることも考えられる。つまり、心理的リアクタンスがおこると予想される。

服装への関心と情報収集

流行の服装の採用者は非採用者と違った関心を服装に示していると思われる。近年の若者はルースソックスやぶりさげズボンの例でも明らかのように既成の服を「だらしく」着る。やや誇張するならば、これらの流行の採用者は自己主張的、斬新・革新的、おしゃれで、実用性を無視しているようだ。このような流行に目ざとい者は、流行に関する情報をどのように得ているのであろうか。一つの情報源は雑誌。テレビなどのマスメディアである。流行に敏感な者はマスメディア情報をよく得ているし、マスメディア情報に敏感な者は流行にも精通するであろう。もっとパーソナルな情報収集手段としては他者と自己を比較して自分の行動の適切性の指標とする社会的比較行動（Festinger, 1954）も考えられる。容姿や服装など人目に着きやすい特徴は見知らぬ相手と盛んに比較される傾向にあり自分との差異に注意が向きやすい（三宅, 1995 ; Wheeler & Miyake, 1992）。キャンパスや繁華街の路上が情報収集の場所となり、日頃社会的比較をする傾向の高い者にとっては自分の服装などを他者と比較することは重要な情報収集手段であろう。

過大視バイアス

ある生活様式について、どの位の割合の人がその生活様式をしているのかが話題になることがよくある。例えば、職場などで何パーセントの人がタバコを吸っているのかについて議論になることもある。流布度の判断には大きな個人差がつきまとうことも日常的な経験である。何が流布度の判断に影響をあたえるのだろうか。Ross, Green, & House (1977) によれば人は自分の選択した行動様式はより多くの人にもまた選択していると認識する傾向にあることを見出し、この傾向を過大視バイアス現象 (false consensus phenomena) と名称した。つまり採用者は自分達と同じ採用者が多くいると判断し、非採用者は逆に非採用者の割合を高く推定する。この双方の過大推定により、採用者は非採用者に比べて採用者の割合を高く推定することになる（勿論、非採用者は採用者に比べて、非採用者の割合を高く推定すると言っても同じ事である）。これをルースソックスに適用すれば、ルースソックスの着用者は非着用者に比べて流布度を高く推定する傾向にあるだろうと考えられる。

Marks & Miller (1987) は過大視バイアス現象が起こる理由を認知的なものと同機能的なものに大別した。認知過程としては選択的交友関係、目立ちやすさ・選択的注意などが挙げられる。流行採用者は同じ採用者と非採用者は非採用者と交友する機会を多く持つ結果、過大的推定を生みやすくするであろう。マスメディアは流行現状を盛んに特集し、社会的比較もまた流行現象への注意を増大させ過大的推定への偏向を助長するであろう。動機的理由としては自尊心高揚が考えられる。自分の選択を他人もまた選択していればいるほど（選択していると思えば思うほど）自分の選択を「正当化」でき自尊心の高揚に役立つであろう。例えば、長期間茶髪をしている者にとってみれば、茶髪採用者が多ければ多いほど自分自身の茶髪の社会的承認が高まり茶髪を正当化できるわけである。

本研究

本研究においては、女子の間で流行のルースソックスの採用度（高校時代・大学一年次）と独自性欲求、セルフモニタリングとの関係、服装関心度との関係を高校時代の規制の強度との関係を考慮に入れて調査した。筆者らの野外観察（平成8年秋）によれば、首都圏（東京、池袋）では90%以上の女子高校生がルースソックスを着用し、また地方（宮崎）でも65%程度の女子高校生が着用していた。これを考慮にいれた場合、地方都市においてもルースソックスの流行はもはや頂点を迎え、新奇さは失われたと考えるべきであろう。また流行の採用と情報収集の関係（雑誌購読、社会的比較傾向）、流行の服装への態度（選好度）も測定した。ルースソックスの流布度について過大視バイアス現象がおこるかどうか、そして過大視バイアス現象を独自性欲求、選好度、情報収集手段との関係を含めて調査した。最後に、ポケベル、茶髪というルースソックスとほぼ時期を同じくして流行になった若者の流行現象も調査対象とした。本研究で検定した仮説は以下である。

- 仮説1：大学生になってからのルースソックス着用頻度は同調性が高い者や独自性が低い者ほど高いであろう。
- 仮説2：自己、両親のルースソックスへ好意を持っている者、雑誌購読の多い者ほどルースソックスの着用頻度が高いであろう。
- 仮説3：高校の校則がある程度ルースソックスを禁止していた場合は、独自性欲求が高いほど高校時代のルースソックスの着用頻度が高いであろう。
- 仮説4：高校がルースソックスをまったく禁止しなかった場合は、同調性の高い者ほど高校時代のルースソックスの使用頻度が高いであろう。
- 仮説5-a：流行の採用者は非採用者に比べて流行の採用者の割合を高く推定するであろう（過大視バイアス）。
- 仮説5-b：過大視バイアスは流行採用頻度・期間、流行への態度（選好）、雑誌情報、社会的比較傾向が多いほど高くなるであろう。
- 仮説6：茶髪の採用者、ポケベルの所持者はまたルースソックス着用頻度が高いであろう。

方法

被験者

宮崎市周辺の大学一年の女子学生 138 名（平均年齢、18.7 才、sd = .59）を対象に質問紙調査を

平成8年の秋に実施した。心理学のクラスでは授業の教材の一部として活用された。

質問紙

質問紙は次の7つの部分からなっている。

1) ルースソックス ルースソックスの着用頻度を高校3年(夏休み以降)と現在(大学一年次)の2つの期間に分けて週何回ルースソックスを着用したかを6段階(0=まったくしなかった、から5=週5回もしくは毎日)のリカー尺度を用いて測定した。

高校での規制の強度は次の4選択枝から一つ選ばせた。(1)絶対に禁止だった(2)禁止だったがあまりうるさくいわれなかった(3)禁止ではなかったが注意された(4)何とも言われなかった。分析上(2)と(3)を併せて「ある程度の規制」群とした。ルースソックスへの態度は「あなたが高校生の時、ルースソックスをどう思いましたか」と「あなたが高校生の時、あなたの両親(特に母親)はルースソックスをどう思いましたか」の二項目に対して1(みっともない)から7(よいファッション)の7件法を用いて測定した。男子のずりさげズボンへの態度は「あなたが高校の時、男子のずりさげパンツをどう思いましたか」に対して1(みっともない)から7(よいファッション)の7点尺度を用いて測定した。

ルースソックスの流布度は「あなたの大学の何%位の人がルースソックスを最近しているとおもいますか」という項目に対して0から100%までの数字で答えさせた。

2) 茶髪 茶髪の経験は(1)現在している、(2)以前していた、(3)したことがないの選択枝から選ばせた。茶髪への態度は「一般的に言って茶髪をどう思いますか」に対して1(みっともない)から7(よいファッション)の7件法を用いて測定した。茶髪の流布度の推定には「あなたの学校の同性の学生の何%ぐらいが茶髪に現在しているか、もしくはしたことがあると思いますか」に対して0から100%までの数字で答えさせた。茶髪採用期間は茶髪期間を尋ねた。

3) ポケベル ポケベル所持を二者択一「はい」「いいえ」で回答させ、流布度の質問にはルースソックスと茶髪項目と同様に0から100%までの数字で「あなたの学校の学生の何%ぐらいがポケベルを持っていると思いますか」に答えさせた。加入期間の測定には加入時期を____年____月、という形で答えさせた。

4) 雑誌情報 雑誌購読は60の女性ファッション・生活情報雑誌(例、セブンティーン、JUNON)のリストのなかから「ときどき、もしくはたいへんよく読む(読んだ)」ものに印をつけさせ、その総数を雑誌情報の指標とした。

5) 独自性欲求 Snyder & Fromkin (1980) の Uniqueness Scale の日本語訳(岡本、1991)を用いた。邦訳版独自性欲求尺度は32項目の5段階尺度(1=全然当てはまらないから5=非常によく当てはまる)で8つの下位尺度からなる。下位尺度は(1)一般的な意見表明に関する態度(2)他人からの批判に対する態度(3)所属集団からの心理的自由(4)反対意見など抵抗のある場合の意見表明に関する態度(5)進取の気風(6)攻撃的な自己表現(7)規則に対する態度

(8) 社会習慣に関する態度からなる。

6) セルフモニターリング Snyder (1974) の Self-monitoring Scale の Lennox & Wolf (1984) による改訂版を用いた。改訂版セルフモニターリング尺度は33項目からなり、1 (まったく当てはまらない) から6 (たいてい当てはまる) の6段階尺度を用いた。改訂版セルフモニターリング尺度の下位尺度は「自己提示変容能力尺度」「感受性尺度」「場面的可変性尺度」と「社会的比較尺度」からなり、最初の2尺度は大淵 (1991) の訳出を用い、残りの2尺度は本研究のために訳出した。自己提示変容能力尺度は自分の対人行動を印象操作のためにコントロールする能力、感受性尺度は他者のノンバーバル行動解釈能力、場面的可変性尺度は相手、場所、環境に応じ行動を採る度合、そして社会的比較尺度は社会的比較行動傾向を測定する。

7) 被服の関心度 藤原 (1986) による Creekmore (1971) の「被服関心度測定尺度」の改訂日本語訳版を用いた。本研究では7段階尺度 (1 = 全然同意しない から 7 = 非常に同意する) で被験者に回答を求めた。「被服関心度測定尺度-改訂日本語訳版」は28項目からなり、(1) おしゃれ志向 (2) 実用性 (3) 同調性 (4) 保守性 (5) 慎み深さ (6) 着心地の重視、の6つの下位尺度を構成する。

分析

過大視バイアスの分析は Ross に従い流行の採用者 (ルースソックスの着用、茶髪の経験、ポケベル所持) の推定流布率と流行の非採用者による推定流布率を比べた。前者の推定率が後者の推定より高ければ過大視バイアスがあったとみなされる。被験者の間での流布率 (ルースソックスの着用、茶髪の経験者、ポケベル所持) を母集団の「母数」とみなし、推定流布率からこの母数を引いて「過大視バイアス指標」として推定流布率が実際の流布率よりも有意に高いかどうかを分析した。しかしながら、過大視バイアス指標が0より有意に高いかどうかは過大視バイアスの定義上問題とはならない。

結果

ルースソックスの着用者

高校三年次後半の着用頻度は週 3.10 回 (sd = 1.96) で大学一年次では 1.58 回 (sd = 1.69) であった。表1 (一番左の欄) に高校三年次後半と現在のルースソックスの着用頻度と他の項目との相関関数を示した。

高校時代の着用頻度と独自性欲求総合得点には傾向意な相関 ($r = .17, p < .06$) があった。つまり、独自性欲求の高い者はルースソックスをより頻繁に着用する傾向があったということである。下位尺度では「規制への抵抗的態度」が高い者はルースソックスの着用頻度が高かった ($r = .19, p < .05$)。大学生になってからの着用頻度と独自性欲求総合得点には有意な相関関係は見られなかったが「進取の気風」と「集団からの自由」の低い者はルースソックスの着用頻度が高いという傾向をしめした ($r = -.16, p < .10$)。場面的可変性 (セルフモニターリング) が低い者は高校時代と現在の着用頻度が高かった ($r = -.24, -.26, p < .01$)。つまり、異なった状況や環境の下でも行動に一貫性のある者は着用頻度が高かった。被服の関心度の下位尺度と着用頻度とにも有意な相関が見い出された。おしゃれ志向

尺度は高校三年次そして現在の着用頻度と正の相関を示した ($r_s = .32, .19, p_s < .05$)。「服装の同調性」が高い者は高校三年次と現在の着用頻度が高かった ($r = .19, .29, p_s < .05$)。これら二つの尺度とは逆に「実用性」、「保守性」、「着心地尺度」の高得点者は高校三年次で着用頻度が低かった ($r_s = -.22, -.29, -.28, p_s < .01$)。現在の着用頻度は「慎み深さ」とのみ正の相関を示した ($r = .19, p < .05$)。だらしないファッションへの肯定的な態度を表明した者は高校三年次の着用頻度が高かった。本人の態度 ($r = .33, p < .01$)、両親の態度 ($r = .32, p < .05$)、男子のずりさげズボン ($r = .43, p < .05$)、さらには雑誌購読を例外として肯定的な態度は現在の着用頻度とも正の相関関係を示した ($r_s > .21, p_s < .05$)。

高校時代の規制の程度とルースソックスの着用

高校時代の規制の強弱をもとに、全体の被験者を(1) 厳しい規制 ($N = 42$) (2) ある程度の規制 ($N = 32$) (3) 規制なし ($N = 62$) の3群に分けた。グループ毎にルースソックスの着用頻度と他の項目との相関関係を調べた。結果は表1に示した。

厳しい規制群 表1から分るように高校三年次および現在のルースソックスの着用頻度と独自性欲求とのあいだには有意な相関は見い出されなかった。「場面的可変性」(セルフモニターリング)が低い者は現在の着用頻度が高かった ($r = -.32, p < .05$)。「慎み深さ」(被服関心度)の高い者程現在ルースソックスを着用する傾向にあった ($r = .31, p < .05$)。高校時代の着用頻度は雑誌購読、ルースソックスへの本人の態度、ずりさげズボンへの態度と正の相関を示し ($r = .41, .42, .37, p < .01$) 現在の着用頻度はルースソックスへの本人、両親の態度と正の相関を示した ($r = .41, .52, p < .01$)。

ある程度の規制群 高校三年次の着用頻度は独自性総合得点、「意見表明」、「規制への態度」と有意な正の相関を示した ($r_s > .36, p < .05$)。つまり、自己主張の強い者程ルースソックスを着用する傾向にあった。「おしゃれ志向」の高い者、「被服の実用性」を重用視しない者、そして「保守的」でない者は高校時代ルースソックスを着用する傾向にあった。現在の着用頻度と被服関心度との関係は全体的に低く、「おしゃれ志向」と「実用性」の重視が傾向的な相関を示したのみであった ($r_s = .31, -.32, p < .10$)。高校時代の着用頻度はルースソックスへの本人、両親の態度、ずりさげズボンへの態度と正の相関を示し ($r = .67, .49, .38, p < .01$) 現在の着用頻度との関係は有意ではなかった。

規制なし群 独自性尺度との相関は高校時代、現在とも有意ではなかった。被服関心度の下位尺度、場面的可変性(セルフモニターリング)が低い者は高校時代 ($r = -.30, p < .05$) と現在の着用頻度が高かった ($r = -.21, p < .10$ $r = -.21, p < .10$)。「おしゃれ志向」の高い者、「同調性」の高い者、「保守性」の低い者、「着心地」を重視しない者は高校三年次にルースソックスを着用する傾向にあり ($r = .45, .25, -.36, -.29, p < .05$) また現在の着用頻度と被服の「同調性」とには正の相関が見い出された ($r = .35, p < .01$)。高校時代の着用頻度は雑誌情報、ルースソックスへの本人、両親の態度、ずりさげズボンへの態度のすべてに正の相関を示したが ($r_s = .35, .58, .28, .47, p_s < .05$) 現在の着用頻度との関係は有意ではなかった。

表1 ルーズソックスの着用度と質問紙、雑誌情報とルーズソックスへの態度との関係

	全体 (N = 136)		厳しい規制 (N = 42)		ある種の規制 (N = 33)		規制なし (N = 63)	
	三年次	現在 ^a	三年次	現在	三年次	現在	三年次	現在
独自性								
総合得点	.17*	-.07	-.01	.15	.40**	.07	.13	-.04
意見表明	.15	-.06	-.10	-.20	.37**	.07	.17	.08
他人の批判	-.05	.06	.17	.15	-.08	.01	-.19	.01
集団からの自由	.02	-.15*	-.09	-.25	.23	.18	.08	-.20
反対意見	.16*	-.01	.08	.09	.29	.10	.16	-.13
進取の気風	-.01	-.16*	-.20	-.24	.31*	-.10	-.04	-.10
攻撃的自己表現	.16	.09	.05	.02	.27	.32*	.20	.03
規制への態度	.19**	-.00	.07	-.05	.36**	-.09	.18	.07
社会的習慣	.10	.02	.15	.05	.27	.10	-.03	-.11
セルフモニターリング								
自己提示変容能力	-.09	-.05	.01	-.18	-.05	-.18	-.16	.10
感情性	.00	-.06	-.05	-.06	.36**	-.09	-.06	-.06
場面的可変性	-.24***	-.26***	-.23	-.32**	-.02	-.21	-.30**	-.21*
社会的比較	.01	.13	.20	.09	-.24	-.12	-.02	.23*
被服関心度								
おしゃれ志向	.32**	.19*	-.03	.27	.47**	.31*	.45**	.19
実用性	-.22**	-.19	-.15	-.18	-.40*	-.32*	-.22	-.08
同調性	.19*	.29***	.19	.26	-.01	.25	.25*	.35**
保守性	-.29***	-.07	-.09	-.11	-.39**	-.16	-.36***	.03
慎み深さ	.08	.19**	.28*	.31**	-.26	-.13	.10	.24*
着心地	-.28***	-.08	-.29*	-.20	-.18	-.04	-.29**	.03
雑誌購読	.33***	.05	.42***	.10	.23	.16	.35***	.08
ルーズソックスへの態度								
本人	.53***	.27***	.41***	.41***	.67***	.25	.58***	.20
両親	.32***	.33***	.25	.52***	.49***	.24	.28**	.20
ずりさげズボン	.43**	.21**	.37**	.29*	.38**	.25	.47***	.18

* p < 10, ** p < 05, *** p < 01

^a 「現在」の被験者総数は136 (厳しい規制 = 42, ある種の規制 = 32, 規制なし = 62)

表1の結果をまとめると次の様なことが言えるだろう。独自性欲求とルーズソックスの着用度の相関はほとんどなかったが、被服行動の同調性の高い者ほどルーズソックスの着用が高かった。仮説1

は部分的に支持された。ルースソックスへ態度、雑誌情報とルースソックスの使用頻度には正の相関があり、仮説2は支持された。高校の校則がある程度ルースソックスを禁止していた場合は、独自性欲求が高いほど高校時代のルースソックスの使用頻度が高く仮説3は支持された。高校がルースソックスをまったく禁止してなかった場合は、同調性と高校時代のルースソックスの使用頻度に正の相関が見い出され仮説4は支持された。

次にこの3群の間でルースソックスの着用頻度の違いと高校時代から現在にかけて着用の変化を分散分析で調べた。平均頻度は表2に示した。グループ間の平均着用度には差がなかった、 $F(2, 133) = 1.0, ns$ 。が高校三年次から現在にかけて着用頻度は半減した(3.10から1.58)、 $F(1, 133) = 81.56, p < .001$ 。時間(高校から大学) \times グループ(規制群)相互作用は有意であった、 $F(2, 133) = 5.18, p < 0.1$ 。3群の減少幅は厳しい規制群では.77(2.79から2.02)、ある程度の規制群では2.10(3.63から1.53)そして規制なし群では1.74(3.05から1.31)であり、厳しい規制群で減少幅が他の2群より有意に小さかった。つまり、ある程度、もしくは全く自由に行動できたグループでは厳しく規制されたグループに比べてルースソックスの着用頻度がより少なくなったということである。ルースソックスへの態度、母親の態度、そして男子のずりさげボンへの態度には3群で差はなかった($F_s < 1.0, ns$)。しかし雑誌情報には3群の間で有意に差があった、 $F(2, 134) = 3.61, p < .05$ 。平均雑誌数は厳しい規制群、ある程度の規制群、規制なし群の順に7.34, 9.91, 10.95であり、規制なし群の雑誌情報が厳しい規制群に比べて有意に多かった。また、3群の間には独自性欲求尺度と被服選好度の各尺度の得点には差がなかった。

表2 高校時代の規制の程度とルースソックスの着用頻度

	規制の程度		
	厳しい規制	ある程度の規制	規制なし
高校三年次	2.79 (2.06)	3.63 (1.60)	3.05 (2.07)
大学一年	2.02 (2.01)	1.53 (1.55)	1.31 (1.49)

頻度は0から5までの6段階であった(0=全然、5=週5回もしくは毎日)
括弧内は標準偏差

茶髪の採用者

現在、茶髪にしている者、以前していた者、したことがない者の割合35.7, 14.7, 49.6%であった。茶髪の経験者と未経験者の間に独自性、セルフモニターリング、被服関心度に違いはなかったが、茶髪の経験者は未経験者に比べて、雑誌情報をよく得ていることが判明した、 $F(2, 125) = 3.47, p < .05$ 。平均雑誌数は10.3(現在している)、11.9(過去にしていた)、7.9(したことがない)であった。

ポケベルの所持者

全体の56.6%がポケベルを所持していた。ポケベルの所持者と非所持者には独自性欲求の下位尺度の得点に差があった。所持者は他者の批判に対する態度が高く、 $t(132) = 2.09, p < .05$ 、集団からの自由度が低く、 $t(132) = -2.28, p < .05$ 、反対意見への意見表明をし、 $t(132) = 2.05, p < .05$ 。さらには、所持者はおしゃれ志向であり、 $t(136) = 2.08, p < .05$ 、実用性を重用視せず、 $t(135) = 3.02, p < .01$ 、保守的ではない、 $t(136) = 2.03, p < .05$ 、着心地にあまり注意を払わない、 $t(136) = 2.12, p < .05$ 、という傾向があった。セルフモニターリングの下位尺度には違いがなかった。ポケベルの所持者と非所持者との間の雑誌情報の違いは傾向意であった(10.3 vs. 8.1)、 $t(126) = 1.87, p < .10$ 。

過大視バイアス

ルースソックスの現在の着用者-非採用者、茶髪採用者-非採用者、ポケベル所持者-非所持者のグループの推定流布率と過大視バイアス指標を計算し結果を表3に示した。

表3 流行の流布推定、過大視バイアス指標：ルースソックス、茶髪、ポケベルの経験

	実際の採用率	推定割合	過大視バイアス指標	t	p
ルースソックス					
着用者	60.2% (N=56)	37.9%	-22.3%	6.12	<.001
非着用者	39.8% (N=36)	17.5%	-42.7%	12.00	<.001
	$t(91) = 4.78, p < .001$				
茶髪					
現在している	35.7% (N=49)	68.8%	33.1%	7.61	<.001
過去にしていた	14.7% (N=19)	67.6%	31.9%	3.09	<.01
経験なし	49.6% (N=66)	56.1%	20.4%	1.77	<.10
	$F(2, 134) = 5.65, p < .01$				
ポケベル					
所持者	56.6% (N=74)	80.6%	24.0%	18.67	<.001
非所持者	43.4% (N=64)	72.3%	15.7%	6.43	<.001
	$t(136) = 3.68, p < .001$				

推定割合は着用者推定（ルースソックスの場合）現在の採用者推定（茶髪の場合）所持者推定（ポケベルの場合）。
過大視バイアス指標 = (推定割合 - 実際の割合)

ルースソックス 全体の60.2%の被験者が週一回もしくはそれ以上着用しており、残りの39.8%の被験者は皆無であると答えた。着用者の推定(37.9%)は非着用者(17.5%)よりも有意に高く着用

者ほど着用率を高く推定した。しかし、バイアス指標はマイナスであった (-22.3%と-42.7%)。

茶髪 茶髪の経験者は茶髪経験者の割合を経験のない者に比べてより過大視する傾向にあった、 $F(2, 134) = 5.65, p < .01$ 。推定割合は68.8% (現在している)、67.6% (以前していた)、56.1% (経験なし)であった。過大視バイアス指数は33.1% (現在している) 31.9% (以前していた) 20.4% (したことがない)であった。最初の二グループの指数は0より有意に大きかったが ($t_s > 5.56, p < .01$) 最後のグループの指数は傾向意 ($p < .10$)であった。経験の如何にかかわらず実際より高く推定する傾向にあったがバイアスは「したことの無い者」よりも「現在している」者により顕著であった。

ポケベル 所持者と非所持者による推定ポケベル所持率は80.6%と72.3%であり、二者間の差は有意であった、 $t(127) = 3.16, p < .01$ 。つまり、所持者は非所持者に比べてより多くの学生も持っていると推定した。過大視バイアス指数 (24.0%と15.7%) は双方とも0より有意に高かった、 $p_s < .001$ 。ルースソックス、茶髪、ポケベルのすべてで仮説5-aは支持された。

次に推定流布率 (過大視バイアス指標を用いても結果は同じである) と着用頻度 (ルースソックスの場合)、採用、所持期間 (茶髪、ポケベルの場合)、雑誌情報、本人の態度 (ポケベルを除いて)、独自性欲求、セルフモニターリングそして被服関心度との相関関係を調べた。結果は表4に示した。ルースソックスの推定流布率と雑誌情報、社会的比較との相関 ($r < .13$) は有意ではなかったがルースソックス着用者の間で着用頻度が高ければ高いほどバイアスが大きい傾向にあった ($r = .26, p < .01$)。茶髪の推定流布率と採用期間、雑誌情報、社会的比較 (セルフモニターリング)、本人の態度との相関はすべて有意であった、($r_s = .25, .18, .20, .32, p_s < .05$)。つまり、茶髪の期間の長い者、雑誌情報の多い者、茶髪に肯定な者、そして社会的比較を多くする者ほど茶髪率が高いと推定した。社会的比較を多くする者はポケベルの所持率を高く推定した ($r = .21, p < .05$)。推定流布率とポケベル所持期間、雑誌情報の相関は有意ではなかった ($r < .18, ns$)。仮説5bは茶髪に関して最も支持された。また採用頻度/期間と社会的比較もまた推定流布率と大きくかかわっているようであった。

表4 過大視バイアス指標の相関関係

	ルースソックス (N=93)	茶髪 (N=136)	ポケベル (N=136)
頻度/期間 ^a	.26**	.25*	.18
雑誌情報	.13	.18*	.07
態度	.15	.32***	--
社会的比較	.05	.20*	.21*

* $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$

^a 頻度/期間については N=56 (ルースソックス) 68 (茶髪) 74 (ポケベル)

表5 茶髪の経験、ポケベルの所持とルースソックスの着用頻度および態度

ルースソックス頻度	茶髪			P	ポケベル		P
	現在 している	過去に していた	経験なし		所持	非所持	
高校三年次	3.58	3.50	2.65	<.05	3.93	2.16	<.001
大学一年次	1.78	1.65	1.42	ns	2.03	1.06	<.001
本人の態度	5.10	5.30	4.51	<.05	5.20	4.22	<.001

ルースソックス、茶髪、ポケベル

この三種類の流行にはどのような関係があるのだろうか。茶髪の経験者（現在、過去）は未経験者に比べて、高校時代ルースソックスをより頻繁に着用する傾向にあった、 $F(2, 135) = 3.88, p < .05$ 。またルースソックスに対して肯定的な態度を表明した、 $F(2, 135) = 3.55, p < .05$ 。表5参照。ポケベルの所持者は非所持者に比べて、ルースソックスをより頻繁に着用する傾向にあった：高校時代、 $t(136) = 5.93, p < .001$ 、現在、 $t(136) = 3.44, p < .001$ 、そして所持者はより肯定的な態度をルースソックスに対して示した、 $t(136) = 3.21, p < .01$ 。ポケベルの所持/非所持と茶髪の採用/非採用には有意な関連が見い出された。 $X^2(3) = 8.93, p < .02$ 、ポケベルの所持者の45.2%は現在茶髪にしており、16.4%が過去に茶髪にしてい、38.4%がしていなかった。非所持の間では、茶髪は現在23.2%にすぎず、12.5%が過去に経験があり64.3%がしていなかった。以上の結果からルースソックス、茶髪、ポケベルには密接な関係があり、仮説6は支持された。

考察

本研究では今流行のルースソックスを中心に、茶髪、そしてポケベルという若者の流行現象を性格特性、被服への関心、情報収集、そして流行の流布度の認知に焦点を当て研究した。

いくつかの興味深い結果が得られた。まず第一に、全体的にみると高校時代のルースソックスの着用は独自性、規則への反発的態度、おしゃれ志向、非実用的服装と関係があり、大学になってからの着用にはおしゃれではあっても、慣れたものへのこだわり（進取の気風の低さや慎み深い服装）と他人への同調性の高さという側面が見い出された。ルースソックス着用は女子高校生の型にはまった制服への反抗とも考えられ自由な行動に対する規制が独自性欲求の行動的発揮を促したと考えられる。つまり、画一的な制服着用規制に対して個性的でありたいとの反発が独自性と着用度との関係として現われたと言える。あまりにも画一化され他人と同じ行動を強いられた時、「個性的行動」が採用されたのであろう。大学に入学してからのルースソックス着用頻度が所属集団からの心理的自由度のなさや服装の同調性や慎み深さとかかわっていた。本研究は流行現象の普及の最盛期に行われ、流行の普及経過（Rogers, 1996）からするとこの時期の流行採用動機は同調性であるという先行研究（川本、1981）の結果と一致した。大学生になってからの着用は慎み深さとかかわっていたという結果も興味深い。ルースソックスは基本的に高校生のファッションであり、ルースソックスの大学生は高校時代

にそれが許されなかった「遅れてきた少女たち」と称ぶことができるかもしれない。高校時代に厳しい規制があった場合に着用の減少幅が一番小さかったことはこの解釈と一致する。

しかしながら、独自性とルースソックスの着用は高校時代の服装規則の強度と関わっていた。厳しくはないが自由な行動への規制があった場合、独自性欲求と高校時代のルースソックス着用には正の相関関係が見い出された。しかし、服装に厳しい規制があった場合には独自性欲求、被服選好度とルースソックス着用の間にはなんの相関関係も見い出されなかった。つまり行動への状況的規制が強かった場合には性格特性は行動と関係しなかった。独自性欲求は自由な行動に障害がある程度あった場合に、行動のはけ口を求めロメオ・ジュリエット効果 (Driscoll, Davis, & Lipetz, 1972) とも言われる逆効果を生み出したようだ。この解釈を裏付ける結果は服装規制があまり厳しくなかった群では大学生一年次にかけて着用度の減少幅が一番大きかったことである。大学の自由な雰囲気は心理的リアクタンス (ロメオ・ジュリエット効果) を失わせたとであろう。

本研究の結果は制服規制の在り方に多少なりとも疑問を提示しているようにも考えられる。日常生活ではさまざまな形で行動への制約がともない、欲求が即行動につながらない場合が多くある。高校生では学校の規則が大きく生活を規制し、ルースソックスなどはその例であろう。無理な規制はなかなか守られなく (ルースソックス規制は高校時代の着用頻度を極端に減少させたとは考えられなく) かって反発を招くという逆効果すら見受けられたし、また規則が厳しい場合規制解除後の行動にも影響を与えた。教育の現場で制服規制の是非についてより一層の議論が必要かと思われる。

ルースソックス、茶髪、そしてポケベルは若者の三種の神器のようである。採用者/所持者若者のこれらの流行追従現象は包括的であり、一つの流行に敏感な者は他の流行現象にも敏感であり、若者流行文化を形成しているようだ。これらの流行現象の採用者は女性ファッション・生活情報雑誌を多く購読していることも判明した。

過大視バイアスが流行現象に見い出されたことも示唆に富む。ルースソックス、茶髪、そしてポケベル採用者/所持者がこれらの流行採用者/所持者を非採用者/非所持者よりも高く推定した。本研究では過大視バイアスの過程をも併せて調査した。採用者の中で頻度/期間が多ければ/長ければ推定流布度が高かった。つまり、かかわり (involvement) が強い程推定流布度が高かったと考えられる。また採用/被採用を問わず茶髪に肯定的な者程、流布度を高く推定したのは茶髪に肯定的な者が茶髪に「市民権」を与えたいという欲求の現われとも解釈できる。筆者らの (Miyake & Zuckerman, 1993) 先行研究では社会的に望ましい相手 (身体的魅力や魅力的な声の持ち主) との類時性が過大視バイアスの過程であることを見い出したが、本研究では特定の行動に対する肯定的態度も過大視バイアスを増大させる動機的要因であることを見い出した。このような動機的理由のみならず、過大視バイアスには認知的過程も作用しているようであった。三つの流行現象はいずれも人目につきやすく社会的比較の対象になりやすいという特徴もあり、社会的比較という認知過程もまた高い流布度の判断に関与していた (重回帰分析を試みた結果、社会比較は他の変数と独立的に流布度と相関していた)。

本研究の問題点と今後の研究課題

本研究には二つの問題点があると思われる。第一に、ルースソックスの高校時代の着用度の測定を想起法に頼らざるを得なかったことである。つまり、着用頻度は被験者の回顧であり、実際の行動頻

度との間に食い違いがあったかもしれない。第二の問題点は、独自性、セルフモニターリング、服装関心度の回答は現在時点であり、質問紙の信頼性が完全でない限り、これらの得点を過去の行動の独立変数として取り扱うことには方法論上適切ではなかった。ルースソックスは基本的に女子高校生のファッションであるので高校生を対象に調査されるべきであり、本研究で得られたファッションと独自性、同調性との関係は校則の異なった高校で調査し確認されるべきである。

最後に今後の研究課題としては、上記の問題点で触れたように流行採用の動機の調査には流行現象の「現場」で「同時進行」の研究が必要である。また、流行採用のもたらす心理的効果を採用者の性格特性から演繹するのではなく実証的に証明する研究も必要であろう。例えば本研究で調査対象としたポケベルの使用や茶髪の採用が同好者との心理的繋がりを増大させ、その結果孤独感の低減に寄与するかどうかを調査するのは現代の若者を理解するうえでも有益であろう。

引用文献

- Creekmore, A. M. (1971). *Methods of measuring clothing variables*,. Michigan Agricultural Experiment Station Project Number 78, 96, 783.
- Driscoll, R., Davis, K., & Lipetz, M. (1972). Parental interference and romantic love: The Romeo and Juliet effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 510-517.
- 藤原康晴 (1986) 女子大生の被服の関心度と自己概念および自尊心感情との関係 家政学研究、37、493-499.
- 井上和子 (1985) ファッション行動におけるE.M.Rogersの採用者カテゴリーとFishbeinの予測式 関西学院大学社会学部記要、51、122-136。
- James, W. (1891). *Psychology: Briefer Course*. New York: Holt.
- 川本勝 (1981) 流行の社会心理学 東京：草書房。
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1349-1364.
- Marks & Miller (1987). Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, 102, 72-90.
- 三宅邦建 (1995) ローチェスター社会的比較記録研究 宮崎国際大学比較文化研究、1、39-54.
- Miyake, K., & Zukerman, M. (1993). Beyond personality impressions: Effects of physical and vocal attractiveness on false consensus, social comparison, affiliation, and perceived similarity. *Journal of Personality*, 61, 411-437.
- 中川早苗・伊藤結実 (1995) 娘が好む服装と母親が娘に着せたい服装との差異について 繊維機械学誌、48、T113-T119.
- 岡本浩一 (1991) ユニークさの社会心理学 東京：川島書店。
- Buss, A. H. (1986). *Social Behavior and Personality*. Lawrence Erlbaum (大淵憲一監訳「対人行動とパーソナリティ」、1991、北大路書房)。
- ロジャーズ、E. M. (1996) 普及学 東京：産能大学出版部。
- Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The "False Consensus Effect": An Egocentric Bias in Social Perception and Attribution Processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 279-301.
- Snyder (1974). The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- Snyder, C. R. & Fromkin, H. L. (1980). *Uniqueness: The human pursuit of difference*. New York: Plenum.

鈴木浩裕久（1977）「流行」池内一編『講座社会心理学3 集合現象』東京大学出版会

Wheeler, L., & Miyake, K. (1992). Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.